



東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

MYPとDPの効果的運用を目指して：
プログラム評価の趣旨を活かした発展

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-04-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 来栖,真梨枝 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/00173833

MYP と DP の効果的運用を目指して

—プログラム評価の趣旨を活かした発展—

Aiming for Effective Operation of MYP and DP

— Development based on programme evaluation —

IB 委員会 来栖 真梨枝

1章 はじめに（要旨）

本校は 2010 年に国際バカロレア（IB）のミドルイヤーズプログラム（MYP）の認定を受け、今年度で 11 年目を迎える。また、2015 年 3 月にはディプロマプログラム（DP）の認定も受け、今年度（2021 年度）で 6 年目を迎えた。IB 認定校は IB 教育の質保証のため、約 5 年周期で IB によるプログラム評価を受けることが義務付けられている。本校も昨年度（2020 年度）は DP のプログラム評価、一昨年度（2019 年度）は MYP のプログラム評価を受けている。本稿では、二つのプログラムのプログラム評価で IB により示された成果と課題をふまえて、プログラムをさらに発展させるための取り組みについて報告する。

2章 プログラム評価の概要

IB のプログラム評価は MYP・DP 共に主に、Guide to Programme Evaluation にもとづいて実施される。なお、この文書は現段階（2022 年 1 月）で日本語版が発行されていないため、本稿で使用する文言は定訳ではないことをご理解いただきたい。また、プログラム評価に関連する IB 独自の用語は日本語と英語で併記することとする。

IB プログラム評価の目的は、IB 機構が IB 認定校においてそれぞれのプログラムが「プログラムの基準と実践要綱」にもとづいて忠実に実施されているか、また、IB 校として認定を継続することができるかについて評価することである。さらに、IB はプログラム評価を「学校が、学校でのプログラムの開発について、IB からサポートと意味のある、文脈に適したフィードバックを受ける機会である。¹」としている。具体的には、IB 機構側は学校に対して、効果的に実施されているプログラムの側面とさらに発展が必要な側面のどちらも評価を行い、それを踏まえ学校側はプログラムをより発展させるために戦略的に取り組む能力を高め、学校経営者や教師が人的・物的資源をより適切に配分できるようにする仕組みとなっている。本校としては、学校の重要なアイデンティティである IB 校としての認定継続は重要であるが、それ以上にプログラム評価における指摘事項を踏まえ本校における IB 教育をさらに発展・充実させていくことは教育効果のさらなる向上につながるという点において重要である。

プログラム評価の評価要素は以下の 4 点である。①予備レビュー(Preliminary Review) ②セルフスタディー・プロセス(Self-study process) ③学校訪問(School visit)もしくはリーディング(Reading)

¹ International Baccalaureate Organization, Guide to programme evaluation, Published ch 2020, P. 2

④結論 (Conclusion) そして、これらの評価要素に関するやり取りを学校、主にプログラムコーディネーターと IB 機構の担当者が 12 ヶ月間に渡り実施するものである。

なお、後述する MYP・DP のプログラム評価については旧ガイドに則って行われているため、必ずしもこれらの評価要素と合致するとは限らない。

2 章 前回のプログラム評価の結果

1 節 MYP の評価

2019 年度に実施された MYP プログラム評価の結果、認定の継続に関わるような早急に改善すべき指摘事項(“Matters to be addressed”)はなかった。また、評価された点として学校は MYP 評価を MEXT 評価に明確に読み替える対応表を作成していること、大学、地域の図書館との連携により、生徒や教職員の幅広いニーズに応えられていることなどが挙げられた。また、異学年でのグループ作りも可能な学校規模のリサーチチャレンジである ISS チャレンジは、PP でも必要なスキルを獲得できる素晴らしいシステムであると高く評価された。一方、今後本校でプログラムをより発展するための指摘事項として以下のことが挙げられた。

- (1) 生徒の PP の成果を祝う (“Celebrate”する) 機会を設定すること
- (2) 様々な言語を母語とする生徒が在籍する中、日本語と英語以外の言語伸長に対するより充実した支援を実施することが望ましい
- (3) より質の高い授業を協働的に開発することができるような組織的な取り組みを行うことが望ましい

2 節 DP の評価

2020 年度に実施された DP プログラム評価の結果、認定の継続に関わるような早急に改善すべき指摘事項(“Matters to be addressed”)はなかった。また、評価された点として、教育と学習を促進するために様々なリソースを利用することができる点が挙げられた。これは特に本校メディアセンターの取り組みが評価されたものである。一方今後、プログラムを発展させるための指摘事項として以下の課題が挙げられた。

(1) カリキュラムの多様化

「学校は、現在提供している科目とレベルを拡大し、現在の非常に限られた選択肢では適さない学生がプログラムにアクセスできるようにすべきである。」これは DP 認定時にも指摘を受けていたことで、二度目の指摘となった。

(2) 言語支援の充実

「学校は、母語の発達を支援するために、可能な範囲でさらなる可能性を模索すべきである。」

「学校は、母語、ホスト国の言語、その他の言語を含む言語学習の重要性をさらに強調する戦略を検討すべきである。」「学校は、英語に堪能ではない生徒をサポートするための戦略を検討すべきである。」

(3) 学問的誠実性指導の深化

「学校は、学校コミュニティの中で、学問的誠実性についての共通理解をさらに深めるべきである。」

さらに、プログラム評価のための書類を作成する上で校内で課題となったことは「10 の学習者

像」や「国際的視野」の育成に十分に戦略的に取り組むことである。プログラム評価での指摘事項に加えて、この点についても今後5年間をかけて強化すべき側面であると言える。

3章 MYP 今年度の取り組み

1節 母語伸長プログラム：FLS（First Language Support）の開始

2021年度より、プログラム評価での指摘を受け母語伸長プログラムを開始した。本校には日本語、英語の他に中国語、韓国朝鮮語、ドイツ語など多様な言語を母語とする生徒が在籍している。今年度は、その中でも特に数が多い中国語と韓国朝鮮語を母語に持つ生徒を対象に、課後週に1回、もしくは隔週の頻度でオンライン言語レッスンを実施し母語の維持や伸長を支援した。講師は、東京学芸大学との連携により紹介された、主に中国・韓国から東京学芸大学に留学している現職教員に担当していただいている。

FLS 開始当初、MYP コーディネーターが参加生徒のニーズを丁寧に調査し、異学年同一言語によるクラス分けを行った。クラスは大学受験対策や、資格取得、時事問題や日常会話等目的が異なっており、生徒は年度当初参加を希望したクラスに年間を通じて参加することとなっている。今年度一学期の終わりまでに FLS に継続的に参加した生徒は計 15 名（うち、1 年生 2 名、2 年生 4 名、3 年生 1 名、4 年生 4 名、5 年生 1 名、6 年生 3 名）で、韓国語を受講している生徒は 3 名、中国語のクラスは 12 名であった。生徒の振り返りの中には、「(母語であっても普段使用しないため) 曖昧になっていた中国語の知識を復習する機会となった」などの感想が寄せられており、FLS が英語・日本語以外を母語に持つ生徒の強力な支援となっていることがうかがえる。プログラム評価での指摘事項に対応する為に開始した FLS が、本校の特色の一つとして位置づけられていくよう、また生徒の多様なアイデンティティを尊重する機能を持つよう、今後も継続して実施していく予定である。

また、これに関連して本校メディアセンターにおいても 1 学期におこなった「母語支援のための多言語図書」アンケートにもとづき、生徒に必要な 11 言語の図書を加える、「多言語図書コーナー」が設置された。



中国語レッスンの様子



メディアセンター「多言語図書コーナー」

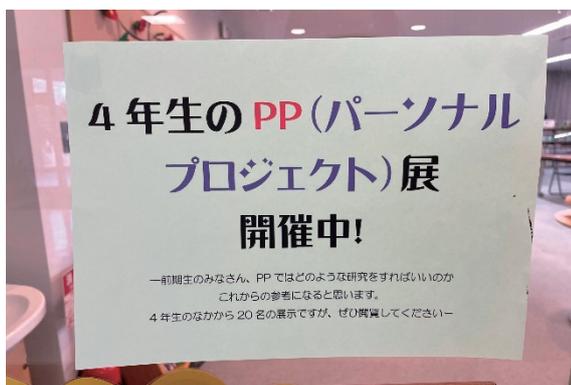
さらに 2021 年度末には、JSL 国際交流委員会主導による Language Lunch の取り組みも開始する予定である。これは英語・日本語以外の言語の学習歴がある生徒が集まり簡単なゲーム等をしながら交流する、主に生徒同士のネットワーキングを目的とした取り組みである。IB 委員会の FLS の取り組みとは目的が異なるが、日本語・英語以外の言語に対する生徒のニーズに応えより多様な言語教育を実施するという側面においては、協働的に発展することが望まれる。

2節 PP フェア交流会

前年度（2020年度）は新型コロナウイルス拡大防止のため、生徒のPPの成果を”Celebrate”する（祝う）機会はかなり縮小した形式での実施となった。2021年は2月19日（土）ISSチャレンジ実施の方向性にともない、PPフェア交流会についても感染症対策を行いながら実施する予定である。ただし、参加生徒は全校生徒ではなく3・4年に限り、また保護者や他のIB認定校は来校せず、規模を縮小して実施する予定である。

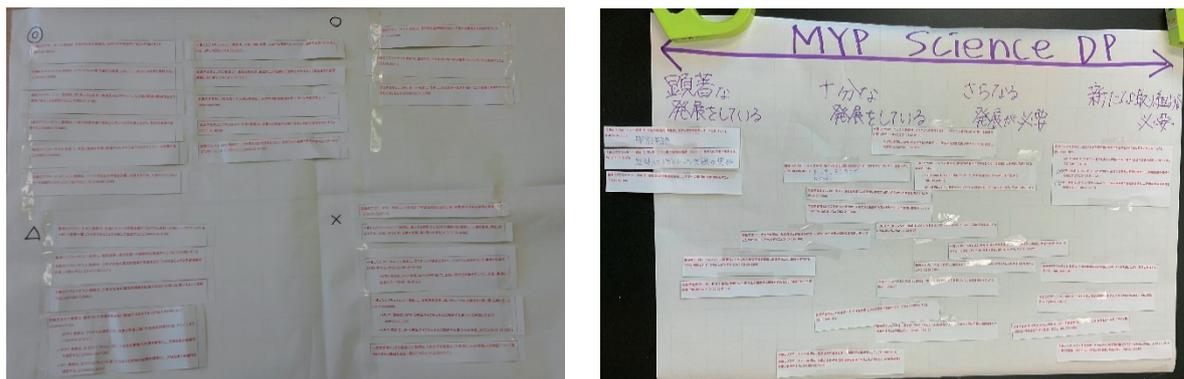
交流形態としては「交流会準備」と「交流会」の二段階で実施する。また、事前課題として4年生がPPの時間に作成した動画をあらかじめ視聴し、コメントを記入しておく。当日の「交流会準備」においては付箋紙に事前に視聴した動画を踏まえてポジティブなフィードバックを記入し、「交流会」にて付箋紙を交換し合う。このような形で、4年生がMYPの集大成として取り組んだPPに対してポジティブなフィードバックを与え合う機会となるよう意図している。

また、PPフェア交流会に先立ちメディアセンターでは生徒によるPPの作品の展示を行っている。これも、生徒のPPをねぎらうための取り組みの一環である。



3節 ユニットプランナーの深化

MYPの授業をさらに協働的に発展・深化させる取り組みとして全教員を対象にIB研修会を計2回開催した。第一回目は6月23日に実施し、MYP・DPプログラム評価の振り返りと本校の課題の共有を行った。また、プログラム評価に直接かかわることの少ない教員にとっては、目にする機会が少ない「プログラム基準と実践要綱」の中の特に「教師」が関わる箇所について全教員が目を通し、より発展させるべき要素は何かについてワークを通して考える機会を設けた。



第二回目は夏季休暇中に各教科教員で集まりユニットプランナーの検討と深化を進めた。既に実施したことのあるユニットプランナーを一つ選択し、探究の問いと学習内容が合致しているか、総括的評価課題が適切かどうかなどについて、教科で検討を進めた。協働的な改善が複数回に渡って実施されている様子が文書上でも伝わるように追記や修正を重ねて行くことで、協働設計の履歴を蓄積することにもつながる。また、その際、MYP ユニットプラン作成の際の原則等を再確認する良い機会ともなった。今後はMYPコーディネーターを含めたIB委員会教員により、各教科から提出されたユニットプランナーを検討しフィードバックする計画である。これを行うことで、有機的な協働設計の枠組みを構築し、さらなる授業改善につなげていくことを目指す。本校では教員が各々授業研究やその深化を進める文化は十分に培われているが、複数の教員で単元や授業について協働的に構成し振り返りを行う機会が必ずしも十分に与えられているとは言えない。そのため、教員が協働的にユニットプランナーを振り返り、改善する試みは今後も継続して設定すべきであると考え。

4章 DP今年度の取り組み

1節 DPミーティングの継続的開催

本校では、DPコーディネーター（以下、DPC）が中心となりDPの科目担当者やDP生のホームルーム担任などが参加するミーティングを月に一回程度開催している。主な機能は、DPCによるIBOからの最新情報の共有、各科目における生徒の学習の進捗状況や課題の共有、また時期によっては内部評価（IA）や成績の算出方法の検討、提出期限の確認など多岐にわたる。

さらに今年度はこれらの機能に追加して、前述した本校DPの課題の一つである「10の学習者像」や「国際的視野」育成のための戦略的な取り組みにも着手した。現在、各DP科目で「10の学習者像」に関連するであろう取り組みを挙げるにより各科目の状況を教員間で共有できただけでなく、それぞれの教員個人がどのように「10の学習者像」を理解しているのかについても認識を共有することができた。来年度以降についても、学問的誠実性指導のさらなる充実の発展なども目指す必要がある。

Aiming for Effective Operation of MYP and DP

– Development based on programme evaluation –

Abstract

The school was accredited by the International Baccalaureate (IB) in 2010 for the Middle Years Programme (MYP) and is now in its 11th year. IB-accredited schools are required to undergo a program evaluation by the IB about every five years to ensure the quality of IB education. Our school also underwent the DP Program Evaluation last year (FY2020) and the MYP Program Evaluation the year before last (FY2019). In this paper, I will report on the achievements and challenges identified by the IB in the program evaluations of the two programs, as well as our efforts to further develop the programs.